

朝里叢書 第七卷

朝里郷土史概観

小林 廣 編

小林 廣 編  
朝里郷土史概観

発行 小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会

## 朝里郷土史概観の発刊にあたって

北海道小樽市朝里地区は昭和十五年に小樽市に合併されるまで、旧朝里村として独立した行政区域であった。区域は熊碓（現桜・望洋台地区）、朝里（現朝里・新光地区）、朝里川温泉（豊倉地区）、張碓地区、銭函地区に広がっている。小樽本市に先立つ歴史を持つこの郷土・朝里への深き思いにかられて、昭和初期に、記録伝承の湮滅を憂い、古老、先達に故事来歴の聞き取りを行い、膨大な資料を残した先人がおられた。楽堂、小林 廣翁、その人である。

資料を整理し、出版にいたらぬまま逝去された廣氏の遺志を継ぐべく、子息・定典氏は、整理されないまま小樽市博物館に保存されていた資料の一部をまとめ、朝里郷土史・「定山と定山溪（平成八年）」、「いなりの坂（平成十四年）」を上梓された。

平成十二年、小樽・朝里のまちづくりの会は、かの資料を朝里郷土遺産に指定した。同会の朝里遺産部会の有志が同志とともに、朝里史談会を発足し、この資料を朝里叢書として逐次刊行することを企画した。

廣翁の上梓しかけた原稿が、五十年の年月を経るも残されており、その中で、郷土の通史として独立している、「朝里郷土史概観」が、その朝里叢書の第一巻にふさわしいと思料した。

編纂にあたって、心掛けたことは、著者の記述の忠実な再現であった。原文は、国語表記に関する、昭和48年の「送り仮名」、昭和56年の「常用漢字」、昭和62年の「現代仮名遣い」に関する文部大臣への答申が出そろった時代より前の記載であるため、原文を尊重した。また、著者がその序文で希望しているように、幾つ

かの点で改編・訂正・変更を行った。

- 一、項目の順は一部、時代が前後した記載であったが、これを年代順とした。
- 二、句読点を加え、明らかに誤用と思われる事例は訂正した。
- 三、俗字と考えられる漢字標記があったが、当時の使用例としてそのまま記載した。
- 四、現在では差別語ととられる語もあるが、時代背景を考慮し、そのまま記載した。
- 五、注釈を要すると思われる部には編纂者の責任に於いて註を付した。

以上、文責はすべて編纂者にあることを付記する。

この出版にあたっては、多くの方の御協力を得た。監修を頂いた小林定典氏、注釈に御助言いただいた市立小樽博物館館長・土屋周三氏、同 主任学芸員・石川直章氏、郷土史研究家・守谷明宏氏、市立朝里小學校同窓会・奥山 稔氏、またワープロ辞書にない外字づくりに助言をいただいた医師・藤田雅彦氏、コンピューター一般に渡り御教示いただいた一級建築士・戸田俊裕氏、印刷に関し御助言いただいた大明印刷の吉田拓一氏、編纂作業に御助力いただいた朝里遺産部会・大友慶二氏、瀧内淳子氏、その他、朝里を愛する諸氏への感謝を記し、筆を置く。

平成十六年 新春

小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会を代表して

末永 通



【郷土の歴史家・樂堂 小林 廣の略歴】

明治二十八年（一八九五）九月十四日、小林與三太郎、スマの五男として、勇払郡安平村下安平（現早来町安平）にて誕生。両親は明治二十七年（一八九四年）福井県春江村安澤より移住した。第四の移住地である朝里尋常小學校を、補習科二年半ばで家業のため中途退學。

明治四十四年三月二十一日、鐵道省に入省（朝里駅踏切番）（十七歳）、大正七年三月八日、朝里村書記となる（二十四歳）が、大正十三年八月、小樽漁業組合書記に転じた（三十歳）。此の頃から文芸趣味を持ち、郷土史研究に没頭。徳富蘆花に師事、並木凡平と交友があり神居古潭・成田不動尊境内の句碑の建立に関わった。著書に「朝里村名勝古跡案内」（昭和九年）、「定山と定山溪」（昭和十三年 札幌尚古堂）、「朝里太平山由来記」（昭和二十六年）などがある。小樽市漁業協同組合在職中、昭和三十年二月二十八日、脳溢血の為逝去、行年六十歳。

## 【目次】

	朝里郷土史概観発刊にあたって	2
	小林廣略歴と肖像写真	4
	朝里郷土史概観目序	1
一	遺物抱含層	1
二	アイヌ族口碑の一節	1
三	知行所制度	1
四	小樽内地名の起原	1
五	漁場請負人制度	1
六	漁場入稼時代	1
七	永住家屋の續立	2
八	第一次道路開鑿	2
九	安政年間の朝里状況	2
十	朝里神社の起原	2
十一	柁里神社の由縁	2
十二	庚申塚	3
十三	柁里地藏尊由来	3
	和人来住以前	1
	和人来住以前	1
	元禄十三年	1
	享保年間	1
	享保年間	1
	安永天明年間	1
	安政三年	2
	安政四年	2
	安政年間	2
	文久元年	2
	文久元年	2
	文久元年	3
	文久二年	3

十四	漁場請負人制度を廃し村並となる	慶應元年	3	2
十五	大平山碑縁起	慶應二年	3	3
十六	八大龍神碑	慶應三年	3	4
十七	荒濱八大龍王神碑	慶應三年	3	4
十八	川裾明神社	慶應三年	3	5
十九	維新当時の状況	明治維新	3	5
二十	小樽内騒動の事	明治元年	3	6
二十一	箱館脱走軍來村	明治元年	3	7
二十二	會津降伏人の滞留	明治二年	3	7
二十三	島判官の着任	明治二年	3	9
二十四	小樽郡の町村	明治三年	3	9
二十五	朝里神社の燭台	明治三年	4	0
二十六	第二次道路開鑿	明治五年	4	1
二十七	戸長制度実施	明治五年	4	2
二十八	札幌間電線架設	明治五年	4	2
二十九	果樹苗の配給	明治八年	4	3
三十	朝里小學校の濫觴	明治九年	4	4

三十一	三條太政大臣の通過	明治九年	45
三十二	朝里山の上中央道路由来	明治初年	46
三十三	第三次道路改修	明治十二年	47
三十四	札樽間鉄道開通	明治十三年	48
三十五	明治天皇御巡幸	明治十四年	50
三十六	土地所有權の争ひ	明治十五年	51
三十七	朝里外三ヶ村戸長役場設置	明治十六年	51
三十八	小樽港の境界	明治十六年	52
三十九	山の上農家入地	明治十六年	52
四十	朝里郵便取扱所開設	明治十八年	53
四十一	小樽漁業組合設立	明治二十三年	53
四十二	共成朝里精米所開業	明治二十四年	53
四十三	小樽区制実施	明治三十二年	55
四十四	朝里外三村衛生組合設立	明治三十二年	56
四十五	朝里村農會設立	明治三十三年	56
四十六	二級町村制実施	明治三十五年	56
四十七	量徳寺朝里説教所開設	明治三十五年	58

四十八	朝里巡查駐在所設置	明治三十六年	59
四十九	小樽水産組合設立	明治三十六年	59
五十	軍用道路開鑿	明治三十七年	59
五十一	第二回の村議改選	明治三十七年	60
五十二	日露戦々死者	明治三十七年	60
五十三	遼陽陥落提灯行列	明治三十七年	61
五十三	第三回の村議改選	明治三十九年	61
五十四	火災	明治三十九年	62
五十五	第四回の村議改選	明治四十一年	62
五十六	造林會社との山争ひ	明治四十二年	62
五十七	朝里小學校の移築	明治四十二年	63
五十八	第五回の村議改選	明治四十三年	64
五十九	朝里神社の奉遷	明治四十三年	64
六十	後志支廳設置	明治四十三年	65
六十一	朝里在郷軍人分會設立	明治四十三年	65
六十二	札樽間鉄道複線開通	明治四十三年	66
六十三	東宮殿下御通過	明治四十四年	66



六十四	第六回の村議改選	明治四十五年	67
六十五	改元	明治四十五年	67
六十六	枉里川氾濫	大正二年	68
六十七	第七回村議改選	大正三年	68
六十八	第一次欧州大戦	大正三年	68
六十九	たらば蟹の大漁	大正四年	69
七十	京都大相撲興行	大正五年	69
七十一	第八回村議改選	大正五年	70
七十二	朝里に電燈點す	大正六年	70
七十三	第九回村議改選	大正七年	70
七十四	山の上青年俱樂部建設	大正七年	71
七十五	開道五十年博覽會	大正七年	71
七十六	巡查駐在所移轉	大正七年	73
七十七	西比利亞出兵と米騒動	大正七年	73
七十八	第十回村議改選	大正九年	74
七十九	第一回國勢調査施行	大正九年	74
八十	朝里海水浴場開設	大正十年	75

八十一	朝里郵便局改築	大正十年	75
八十二	第一回朝里敬老會開催	大正十年	76
八十三	第一回朝里聯合青年團大會	大正十年	76
八十四	第十一回村議改選	大正十一年	77
八十五	攝政宮殿下御通過	大正十一年	77
八十六	小樽に市制施行	大正十一年	78
八十七	朝里川引水問題解決	大正十二年	78
八十八	第十二回村議改選	大正十三年	79
八十九	朝里村役場廳舎竣工	大正十三年	79
九十	小樽漁業組合事務所竣工	大正十三年	80
九十一	町田先生頌德碑建設	大正十四年	80
九十二	第十三回村議改選	大正十五年	81
九十三	青年訓練所開設	大正十五年	81
九十四	朝里駅改築	大正十五年	82
九十五	海岸道路の完成	昭和二年	82
九十六	秩父宮朝里岳御征服	昭和三年	82
九十七	第十四回村議改選	昭和三年	83

九十八	斜面道路の開鑿	昭和四年	84
九十九	札樽國道改修着工	昭和六年	84
百	朝里橋渡橋式	昭和七年	85
百一	第十五回村議改選	昭和七年	85
百二	定山溪自動車専用道路開鑿	昭和七年	86
百三	札樽間省営バス運行	昭和九年	86
百四	魚藍觀音安置	昭和九年	86
百五	朝里岳麓句碑建立	昭和十年	87
百六	朝里郷土研究会創立	昭和十年	87
百七	朝里校創立六十年記念式舉行	昭和十年	88
百八	第十六回村議改選	昭和十一年	89
百九	朝里軍友会設立	昭和十一年	89
百十	満陽丸攔坐	昭和十一年	90
百十一	燈籠流し施行	昭和十二年	90
百十二	凡平歌碑除幕	昭和十三年	90
百十三	朝里、高島、小樽に合併	昭和十五年	91
百十四	補追		94

## 朝里郷土史概観自序

余、少年時より考古癖あり、人類學の泰斗坪井正五郎博士の説に津々たる興味を覺えたる時代ありき。その博士の訃に接するや當時博文館發行の「少年世界」誌上に哀悼の辞を掲げたることもありき。

大正の半頃北海道人類學會の創設あり、進んでその會員となる。

一日小樽の史実家として名ある橋本堯尚翁、余を訪ねて史実談に終日を忘る。爾來、親交十余年に及び、余の史実研究に対し啓發すること尋常ならず。談、偶々坪井博士のことに触れ、翁、壮時、博士の隣家に住み、博士と共に東京近郊を土器石器採集に随行、大いに斯道に対し誘發せられたりと語るを聞き、圖らずも余は少年時を想起し、共に同一人による恩恵を受けしこと奇縁なりと感じたり。

この堯尚翁は洛西と號し、京都公卿の出身、彼の橋諸兄の直裔たり。翁の祖父橋南窓は、維新前の有名なる國文學者にして隨筆家たり。

余、翁と交りて以来屢々小樽圖書館に市内の同好者と會合することあり。その後小樽郷土研究會の創立あり、余、その幹事の一人に加はる。然して惟へらく、我が郷朝里の故事來歴等今にして調査せざれば空しく湮滅せん。余、微力なりと雖も、それを担当して調査記録し置かんやと。即ち爾後、余暇ある毎に古書を繙き古老に訊ね、遺跡を探ねて隨時記録し來れり。されど、余一人の力にては到底初期の目的を達成し得ず、廣く同志を糾合その協力の下に完備せんとこれを同志に諮り、朝里郷土研究會を組織したるは、昭和十年二月なり。

然りと雖も、會員各位夫れゞ多忙の身、斯かる事績調査は殆ど氣狂ひじみざれば遂行し得ざるもの遂に取立て

ての効果なかりしは遺憾なりき。

当時、余は、定山溪開發者たる定山法印の事績調査に没頭し、これが完成後一本の著書として公刊したるは朝里郷土研究會の産出せる結實と見て可ならむ乎。更にまた、当時手宮校長たりし五十嵐鉄氏古代文字研究に没頭、その洞窟發見者と傳えらるゝ石工・長兵エの朝里在留事績調査に余の下に來り。余は全面的に五十嵐氏に協力したることあり、堯尚翁研究に係る小樽福永事件の資料調査に輕川墓地まで行きしこともあり。會津藩士滯留研究については白虎隊十九士傳の著者宗川虎次氏より資料を得たることもあり等々、一々枚舉の煩を避くと雖も要は余の忙中寸閑を割きて郷研究の一端と為したるに過ぎず。

客歲以來、余は朝里PT會の文化部長の重責を負ひ、他の部員と協議して児童教材として朝里郷史を編纂せばやと諮りこれを決定せるも、身は忙々の程にありて到底その緒に着くこと能わず。偶々朝里中學校の新設あり。初代校長小元勝喜氏この郷土史の完成を促すこと頗る切なるものあり。然るに余は、今夏不慮の病患に罹り病床に呻吟すること二ヶ月に及び今尚病後の精養に専念中なりとす。

この間絶へず脳中を悩ましたるはこの郷土史編纂のことなり。幸ひその資料の大半は余の筐底にあり。この際その標目のみを掲げて年代順とし郷土史概観として一本に纏めんかと病床を蹴つて机に向ひ。ペンを執りしは今日一日なり。爾來三週日、素より本篇は短時日の間に稿を急ぎたるため、調査の粗漏、年代の轉倒、或はその記事に於いて幾多の誤謬等なきを保せず。余は努めて記録に基きその正鵠を期せしも、後日誤謬等發見の場合は、その發見者に於いて直ちに補正を為し、或は重要記事脱漏しあらばそれを追加し、よりよき完備せる郷史の完成に裨益し得ば、余の欣快此上なし。

茲に本書を繙く諸彦に対し所感の一端を披瀝して序とすること爾り

昭和二十三年九月二十三日

樂堂 小林 廣 記

小元＝原文には「小元」氏とあるが、小元勝喜氏、朝里小學校長、また朝里中學校初代の校長。

樂堂＝廣氏の号、本文にはない。

第二版では、マッキントシュ基本ソフトOS9で使用した外字作製ソフトがOSXに対応できなくなったので、家印や俗字の構成を変え、本文も改編した。

## 和人来住以前

### 遺物抱含層

石器土器使用時代のことは審らかでない。然しこの土地からも相當多種多様の石器土器の出土があつた。

(一) 石器 枉里川流域に多く出土

種類 石斧 石鏃 砥石 石臼 石棒 石冠

(二) 土器 これも枉里川流域に多く出し、特に和田農園附近に多し。種類は縄文器で弥生式は見当らぬらしい。東北大學教授喜田貞吉博士、道史編纂主任河野常吉翁等、朝里の遺物抱含層を調査に來りしことあり。

和田農園Ⅱ現在の新光三丁目、枉里川右岸附近

## 和人来住以前

### アイヌ族口碑の一節

オタルナイ一帯のアイヌの酋長は熊確に住んでゐた。ある時朝里アイヌの自慢のピリカ、メノコが山のオヤヂ、熊に喰はれた。これを怒った朝里アイヌの青年達は熊狩りをして八ツ裂きにせんとした。これを聞いた酋長はその青年達をなだめて熊を買取り因果を含めて

放してやった。それ以来酋長の家には熊害を蒙ったことがない。

その酋長の子孫に天川恵三郎と云ふ者がゐた。小樽量徳學校の出身で秀才、明治天皇に拝謁の光榮を有した後、浜益に移り天川部落を形成し、アイヌの為め一生を捧げた。

昭和九年六月、旭川で死亡したが、熊獲りの名人であつたが一度も傷を負ふたことがない。

（北海道廳編北海道の口碑と傳説）

酋長Ⅱ部族や土族などの生活集團の長

元禄十二年

知行所制度

（一七〇〇年）

松前藩は管下領地西蝦夷地一帯を場所区割をし、藩士の知行所とした。オタルナイ一帯は氏家唯右エ門の知行所とした。知行主は給地に交易場を設け、年々土人及び和人の商船等と交易して利益を擧げその内から上納金とした。

この知行制度は文化四年幕府が蝦夷地を直轄するに及び罷免せられた。



享保年間

### 小樽内地名の起原

小樽の旧名は小樽内であり一名穂樽内とも称した。オタルナイとは石狩、後志の國境を流る、川の名であり、この享保年間当時の知行主が、この川の鮭漁取締のため、川の流域に散在するアイヌ族を強制立退を命じ、当時のクツタルシ、現在の小樽入舟町及港町へ集團移住せしめた。それでこの界隈をオタルナイ部落と称するやうになり、遂に附近一帯をオタルナイと称し轉化して小樽となった。

享保年間一七二六年六月二十二日から一七三六年四月二十七日まで

享保年間

### 漁場請負人制度

松前藩は知行所制度を設けたるも逐年の経費膨脹に制度を改めて漁場請負人制度とした。而してこの漁場から上る運上金を以って藩の賄に当てた。即ち島場所は西川傳右エ門、小樽内場所は岡田弥三右エ門の漁場請負とした。

寛政年間、朝里に漁場一ヶ所を開いた。一説に慶長年間、八木勘右エ門ナル者福山より小樽内に来り漁場を創設したりとあるもこれは確證すべきものはない。岡田家は西川家と

共に近江國蒲生郡の出身、明治の初年までに十三代連續して入舟町に居所を構へ小樽内を統御した。小樽開發の功勞者である

	通称	(名)	出生	死亡	(行年)
初代	弥三石エ門	玄秀	永禄十一年(一五六八年)	慶安三年(一六五〇年)	八十三
二代	同	?	?	貞享四年(一六八七年)	?
三代	同	?	?	元禄六年(一六九三年)	?
四代	同	?	?	宝永七年(一七一〇年)	?
五代	同	正治	元禄八年(一六九五)	明和二年(一七六五年)	七十一
六代	同	廣考	?	天明元年(一七八一年)	?
七代	コノ間弥三治又	?	宝曆十年(一七六〇年)	安永九年(一七八〇年)	二十一
八代	ハ弥三次ト称シ	常廣	明和元年(一七六四年)	天保十二年(一八四一年)	七十八
九代	タル如クナレド	廣房	寛政六年(一七九四年)	文化十二年(一八一五年)	二十二
十代	モ明カナラズ	?	同	文政四年(一八二二年)	二十八
十一代	八十次	正期	文政四年(一八二二年)	明治四十年(一九〇七年)	八十七
十二代	同	正方	嘉永二年(一八四九年)	大正二年(一九一三年)	六十五
十三代	八十次	?	明治十一年(一八七八年)		

慶長年間Ⅱ一五九六年十月二十七日から一六二五年七月十二日まで 寛政年間Ⅱ一七八九年一月二十五日から一八〇一年二月四日まで

本文では十三代半兵エとあるが、天保以後の松前支店は代々恵比寿屋半兵エと名乗っており、小樽市史資料の岡田西川両家累歴では八十次となっている。ここでは、八十次とした。同じく、名、行年は岡田西川両家累歴（河野常吉著）による。

## 安永・天明年間

### 漁場入稼時代

安永五、六年頃より福山・江差方面は鯉薄漁の年が逐次続いた。この薄は天明寛政に及び更に文化文政に及んだ。これがため松前藩では漁業の衰微を憂ひ盛んに追鯉を奨励し出稼を許容した。その結果和人は圖合船に鯉漁期の準備をし遠く後志の久遠より進んで小樽内に入り春から秋まで漁家を建てて入稼時代を現出した。

文化四年、近藤重蔵が利尻島の露人跳梁の状況検分に来り、その帰途小樽内を視察、幕府に対し建言書を奉った中に「オタルナイよりイシカリ迄の間、レブンノツカ（張碓村礼文塚）と申處迄に、鯉取小屋三百箇所は建續き有之此人數凡そ二千余人、是亦非常の節遣ひ方可有之候」と述べてゐる。以て朝里海浜の入稼家屋の状況察し得ると思ふ。

この時代から入稼した朝里の漁家に原田治五右エ門（清治祖父）、木村栄七祖父、山口徳次郎先代、瀬川孫四郎、村上米作祖先等がある。

安永天明年間Ⅱ一七七二年十一月十六日から一七八九年一月二十四日まで

安永五年Ⅱ一七七六年

天明寛政年間Ⅱ一七八一年四月二日から一八〇一年二月四日まで

文化文政年間ⅠⅡ一八〇四年二月十一日から一八三〇年十一月三十日まで

圖合船Ⅱずあいぶね、松前藩の場諸制度に使われた船で、最初は繩綴船で後、弁財船となったが、七十五石積までに限られていた。さらに天保十二年（一八四一年）以降は冥加金を納めると二百石積み迄の船が許された。（小樽文化史、第三節銀鱗文化三、本文五四頁）  
船幅六尺六寸より七尺五寸まで、二、三人つつ乗り組む船（函館市史、通説編第一卷四〇二頁）

文化四年Ⅱ一八〇七年

安政三年

永住家屋の續立

（1856年）

松前藩は元禄四年神威岬以北への和人婦女通過を禁止した。これがため入稼漁家は總て男ばかりにて女子は一人も来なかった。尚そのために文化の發達が非常に遅れた。

幕府は露国の侵略に備へて松前藩を他に封じ、再直轄として蝦夷地を領地したのは安政元年であつた。

同三年幕府は神威岬以北への婦女の通過を解禁した。この後和人は續々として家族を伴ひ永住の目的を以つて小樽内一帯に居所を構へた。

朝里附近にも安政三年、早くも和人の婦女の姿を見るに至った。

安政元年Ⅱ一八五四年

安政三年Ⅱ一八五六年

安政四年

### 第一次道路開鑿

(1857年)

安政年間には箱館奉行をして西蝦夷地を管轄せしめてゐた。安政元年 幕吏堀織部正利熙、村垣淡路守範正が小樽内を巡視し、幕府に対し西蝦夷地一帯の道路開鑿方急を要する旨建議したに基き、箱館奉行は之を漁場請負人に諭告を發し急速道路開鑿を下命した。

小樽内漁場請負人恵比須屋(岡田)半兵エは安政四年四月、熊碓から起工、錢函まで山谷を迂曲した幅員二間の道路を二里半開鑿した。

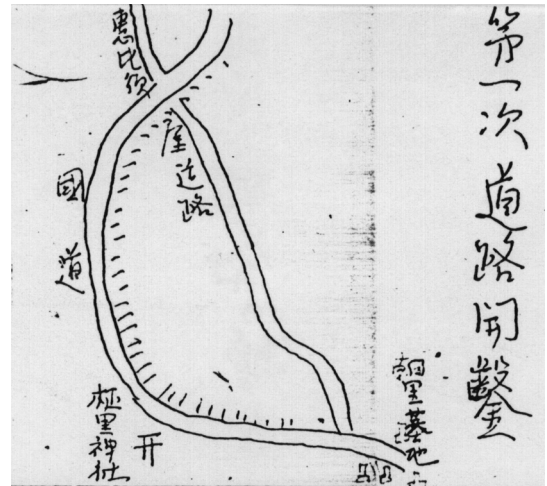
この工事には人夫五千六百余人を要し、内カモイコタンの險難所四十間だけで五百余人を要したと云ふ。

翌五年には朝里川に架橋した。

右の道路を恵比須屋道路と称する

安政四年Ⅱ一八五七年

第一次道路開闢金



小林 廣 作圖

安政年間

安政年間の朝里状況

(一八五四年十一月二十七日～一八六〇年三月十七日)

一、阿部喜任の「蝦夷行程記」より (安政三年)

クツタルシ、ナリ、然レトモ今オタルナイト云フ

オタルナイハ是ヨリ四里許東ニシテ川ノ名ナリ

ノブカ 人家アリ

アットマリ 漁小屋アリ

クマウシ 番屋アリ

アサリ 番屋アリ

チャラセナイ 滝アリ

以下略

二、「協和私役」より（安政三年）

此より近き所にオタルナイ、マシケ、ヨイチ、イソヤ、柄と云ふ良漁所あり。オタルナイ当年諸入用差引残り七千両を得ると云ふ。是地杯にては何も自身漁事を為すに及ばず、坐ながら二分八分の運上金を取る計にて莫大の利を得るなり。故商人常に官吏に賄遣して此の如き良所の請負を願ふなり。去れども是も其の人の運なり。

以下略

協和私役 佐倉藩土窪田子蔵著 藩主外国掛老中、堀田備中守正篤により派遣された

杯 現泊村盃

三、長岡藩士森一馬、高井佐藤太著「罕有日記」より

（安政四年）

カツナイ六町許りにてアツトマリ番屋あり、山道より茲浜辺迄、山にて三里あまりにてレフンツカイ下る。フレッシュ岬薄紅色の岩あり。十三四町にてクマウス。小川あ

り。又十四五町にてアサリ番屋。十町にてマサリ。八町にてレフントマリ。此辺前岸後山とも茂樹也。(オタルナイより此辺迄漁家出稼小屋續く) 又十四五町にてカムイコタン、此岬は一大岩にして高五六十丈、潮頭に聳ひ立つ。其三四合より下には山巔より摧落つる岩片大小となく堆積重疊して海面になだれ、五六十度の勾配なり。未曾有の巨岩なり。此岬下を踰るの人を見るに驚崩れたる岩角を攀傳ひ或は匍匐して黙行す。恐るべきの難所なり此難所のためレブンノツカの山路營造ありと云ふ。

以下略。

#### 四、松浦武四郎「西蝦夷日誌」より (安政四年)

シレエト(岬)廻りて(五町十間)アサラ(小川、番や、蔵々、いなり社) 本名アツウシナイのよし、今訛りてアサリと云い、名義、榆皮多き澤の義。川筋急流(橋有) 両岸嶮しく山皆榎五葉多し。上にタツウシナイ(右川)、ウテヲリコマナイ(左川)、サマツケアサリ(右川)、ヲカマコアンナイ(左股) 上に滝有、其形竈(かまど)の形して両方より差出たる如き瀑布有故號(なづけ)ると。滝をカマと言ふこと前に誌し置ば略す。

山至て嶮しく奇岩怪石多しと。魚類、鱒・鮭・鮎・桃花魚多しと。崖下人家つづき(九



町三十九間）モアサラ（小川）訛りてマサラといふ（五町）アエカラウシ。名いたいた草多しとの義。（三町五間）リフンコ泊、大難所岩石の上棧道を架たり。リリシナイ（出稼）崖下小石浜海に暗礁多し。ケンクワトマリ（二十町廿七間）カモイオロシ（崖下）訛りてカモイコタンといふ。崖高廿余丈掌を立たるごとし。岩崩にして、上に磯馴し老樹一面生ひたり。扱其崖時々崩れ落る故に、土人必ず爰にて木幣（エナホ）を作り山神に手向け無事を祈て行に、大サ五尺、八尺の大割石の簇々たる上を涉り、また勿越飛越潜り行、是惣て数圍の柱石なる也。其眺め倪雲林の皴法もて畫きたる如し。

かもいきし 波浪に白ゆふ 手向けけり

こや海幸の しるしなるらむ

去る寛文度始て崩れ、其翌年東部シビチャリの乱あり。天明八申年また崩て、クナシリの乱有、文化三寅年五月崩て魯西亜有、文政四巳年四月崩て、翌（壬午）復領に成、弘化三（丙午）三月二十七日崩て、其夏五月二十六日ソウヤ領へ異船見へ始しより四海に出没し、エトロフの漂客を始とし、其餘処々の漂客相始まり、何か此地凶事有時は必ず其驗有。依て神處とも土人共尊敬す。

榎五葉Ⅱトドマツ、ゴヨウマツ 北海道に多く建築資材に適すると云う

土人Ⅱその地に生まれすむ人、土着の人

鯨Ⅱあめます

桃花魚Ⅱうぐい

文久元年

朝里神社の起原

(1861年)

天保五年創始と神社明細にありと雖も信憑すべき資料なし。

松浦武四郎西蝦夷日誌にアサラ(小川、番屋、蔵々、いなり社)とあるにより安政三年に稲荷社ありしは事実なり。

越えて文久元年、朝里浜中の住人(当時、桎里より荒浜迄の間を浜中と称す)京都伏見の稲荷神社本宮に対し稲荷分霊懇望の勧請をしたるに對し、

正一位稲荷大明神安鎮之事

右於本宮雖為奧秘依懇望

中祀式令修行奉勸遷

大明神於其請地奥州松前ヲタルナイアサリ浜中志願鎮守尊神也

齊場並祭祀無怠

於尊信者

豊饒萬福可有守護者也

仍如件

城州紀伊郡

稻荷本宮

從四位上 陸奥守

泰 宿弥 忠勝

萬延二年

初春吉辰

右のお墨附きを下附せられた。

尚、明治元年に至り神祇管から公古稻荷の玉串納めを認められ、更に明治四年稻荷總本宮十七日間祈祷の上太麻の下賜があつた。それで朝里神社の御神靈は公古稻荷と云ひ、御靈代は本宮下賜の太麻であるのが本當である。

奥州松前穗足内アサリ 總村中

清蔵

三太郎

28

總村中

世話方

三太郎 殿

天保五年〓1834年

安政三年〓1856年

萬延二年〓1861年

明治元年〓1868年

明治四年〓1871年

慶應四年〓1868年

榎里より荒浜までの間〓朝里1丁目1番地からJR朝里駅附近

文久元年

榎里神社の由縁

(1861年)

榎里神社は榎里川以東を以つてマサリ村と称したれば同村の住人二十軒

勘七、清左エ門、徳松、重三郎、又右エ門、吉兵エ、忠右エ門、藤太郎、寅次郎、

平兵エ、清之丞、若次郎、米松、治五右エ門、吉右エ門、作右エ門、清七、才吉、

勝右エ門、平吉

等合議し、享保年間、神社を建立した。当時この村の總代は加藤又右エ門、木村勘七の二人、小頭は原田治五右エ門であつた。而して治五右エ門方に滞留中の福島大神宮の神官常盤井秀太の弟に当る神官（名を武嗣と云ふ）に依り海上安全、漁業圓滿を祈願し、神鎮ま

り給ひしなり。これに依り新潟、佐渡、越中、越前より海路和人の来航商取引をするの際その大和船の船頭は態々この柁里神社に詣ずるを例とせり。

右の常盤井家は松前神楽の宗家である。

文久元年

庚申塚

(1861年)

ケンカ泊を越へると小さい岬がある。これを坊やの岬と称する。

この附近にこの頃神田才吉なる漁家あり、この主人の發願を以つて今年四月この岬の中腹に庚申塚を建つ。尚当家には時々祭文語り(浪花節語のやうなもの)来りて附近漁民を樂しませたるに因り、いつしか祭文語り、一名仙台坊と云ふに因り、坊やの岬と称するに至る。

庚申塚Ⅱ路傍などに青面金剛を祀つてある塚。庚申(かのえさる)の夜、仏教では帝釈天・青面金剛を、神道では猿田彦を祀つて、寝ないで徹夜する風俗を庚申待という。其の夜眠ると人身中にいる三戸(さんし)が罪を上帝に告げるとも、命を縮めるともいう。道教に由来する禁忌で平安時代に伝わり、江戸期に盛んであった。

今年Ⅱこの年の誤りか

文久二年

(1862年)

### 枉里地藏尊由来

朝里浜中（現保線官舎附近）に小頭役をしてゐる鯨場親方中山三太郎と云ふ者あり。  
この年の旧正月五日、漁場雑倉修築用の木材搬出のため保津船を以つて石狩へ舟出しせしことあり。

而して木材を積込み朝里を指して帰航の途次俄かに暴風起り、カモイコタン沖合にて難船、遂に海底深く藻屑となる。然るにその保津船には三太郎親子兄弟の者七人乗組み居り、遂に七人共海難溺死するに至る。

幸ひ三太郎はこれに加はらず自宅にありて一命は助かりしも、この報に驚愕唯ならず、凡ゆる方法を講ぜしも七名の内一名も助かること能はざりしなり。三太郎深く自己の無謀なりしことを悔ひ、且つ世の無情を覺り、七名の子の冥福を祈らんが為め發願して一大地藏建立、これを枉里墓地の一隅に安置、定山坊を招いて開眼せり。

これ即ち枉里地藏の由来なるも、この地藏に詣ずれば乳なき婦女にも乳を授かるこのことは、本年は恰も戌年に相当し、犬は多數の子に授乳すべきにより斯く云ひ傳へ、偶々その効顯を得し婦人もあれば、一層地藏の功德を宣傳せられしなり。

この地藏祭は毎年六月二十三、四日を例とす。

保線官舎附近＝現在のＪＲ朝里駅山側の駐車場附近

保津船＝保津知船（ホツチ）、江戸時代北海道西岸地方で使われた水押（みおし、船首材）付き漁船の一種、二十石前後のものが多く

慶應元年

漁場請負人制度を廢し村並となる

多年岡田家に依つて支配せられてゐた漁場請負人制度も小樽内人家稠密の度を加へ（こ）  
れは勝納以西信香界隈のこと）たので、名主山田兵藏の名を以つて村並とすべく願出で、  
これが許可を得た。当時の村役人左の通り

名主 山田兵藏

年寄 中野三藏

頭取 津部佐吉（アツトマリ）

同 相原與左エ門（クマウス）

同 五十嵐清藏（アサリ）

同 坂本元吉（ハリウス）

同 小林友三郎（セニハコ）

小頭 糸屋喜左エ門（アツトマリ）



同 堀内儀兵エ(クマウス)

同 中山三太郎(アサリ)

同 與八(ハリウス)

同 西谷嘉吉(レブンノツカ)

同 藤蔵(セニハコ)

#### 当時朝里の人口

永住家 二十一軒 男 五二 女 四五

出稼家 四十軒 男 七三 女 五二

計 六十一軒 二二三人

慶應元年＝1867年、なお、小樽の開基は、以前は慶應元年としていたが、幕府が小樽を村並とした二月一日は元治二年で、慶應と改元されたのは四月八日のため、最近「元治二年」としている。

#### 慶應三年

#### 大平山碑縁起

(1867年)

荒浜の大平山碑は當時朝里川尻に鍛冶屋を営む柴田長太郎なる者あり。

ある年郷里秋田縣山本郡沢目村字目名潟へ妻子四名、妻はな、長女マツ六才、二女タケ

四才、長男長太郎二才を小樽より小舟にて送還せんとしたるにその旅中を案じ祈願のため郷里の大平山三吉明神を祈り、これを当時附近一帯を布教しつつあった定山法印に相談したところ法印これを讃し、碑の建立を議し、碑石に執筆入魂をしたのであった。

而してこれが彫刻には彼の手宮洞窟を発見した石工長兵エであった。長兵エは当時カモイコタンの瀬川藤四郎方に滞在してゐた。

碑には「大平山」と中央に大書し両側に「海上安全、漁業円満」と記し碑の左側上部に慶應三卯年五月十七日太田山人書」と署名した。入魂式前後數日は柴田長太郎外定山法印、石工長兵エ等連日大酒を呑んで騒いだと云ふ。而して妻子は無事帰國するを得、今日尚郷里に住す。

慶應三年

八大龍神碑

(1867年)

五月カモイコタンに住む檜山郡小砂子村の鈴木某、定山法印の入魂に依りカモイコタン崖下に八大龍王神の碑を建立した。

平成二年榎里神社に合祀した。

慶應三年

荒濱八大龍王神碑

(1867年)

七月荒浜住丸山作衛の發願で太平山碑の傍に八大龍王神碑を建てた。

慶應三年

川裾明神社

(1867年)

カモイコタンの住漁家集つて社殿造営を議したがその位置が崖より流るる小川の畔なるよりこれを川裾明神と尊称した。

建立は慶應三年三月である。

社殿腐朽により、平成二年榎里神社に合祀した。

明治維新

維新当時の状況

慶應三年十二月徳川幕府の大政奉還に次で翌明治元年三月明治大帝は岩倉具視等を召して蝦夷開拓を議せしめ、四月箱館裁判所を設置して全道を管轄、清水谷公考を總督に任じた。同五月箱館裁判所を箱館府と改めて新政を施し、總督は知事となった。

明治二年八月二十日兵部省は石狩、小樽、高島の各郡を支配し、翌三年一月八日これを廃止した。

明治二年七月八日開拓使設置、初代長官は鍋島直正で箱館で全道を總轄した。

明治二年八月十五日蝦夷を改めて北海道と称し、十一國八十六郡に分った。その國郡の境界は松浦武四郎の踏破調査した記録と圖面に依ったものである。

オタルナイ川からオコバチ川迄を小樽郡とした。

オコバチ川から忍路境までを高島郡とした。

大政奉還は十月十四日、明治は9月8日改元とされている

明治元年

小樽内騒動の事

(1868年)

四月小樽内の博徒疵金權平、花屋忠兵エは篠路の浪人下國雷蔵、荒谷兵三郎等と謀つて信香町の御用所を襲ひ御用金奪取を企て、博徒仲間と謀議し、閏四月二日夜錢函龍眼寺金比羅堂に集合、漸次張碓、朝里、熊碓の漁家を叩き起し一戸より必ず一名これに参加せよ然らずんば處置すべしと脅して同勢に加へ大舉信香町に押寄せ御用所を襲撃す。これを平定せんが為め当時の石狩役所より役人来り又漁民中應援する者ありて同月七日に至つて

漸く鎮定した。巨魁等はそれぞれ捕へられて勝納川尻に梟首にされた。

朝里漁民もこれに参加した者多数あり又、官軍に味方して旌表せられ者もあった。これを有名な「小樽内騒動」と云ふ。

明治元年

箱館脱走軍來村

(1868年)

明治新政府に対し反感を抱いた幕府方の總帥榎本釜次郎、大鳥圭介等の一黨は軍船を率いて箱館に來り五稜廓に據った。續いて官軍之が追討に向ったのが所謂箱館戦争である。

この時脱走軍の一部は遠く小樽、石狩まで來襲の報が傳はり石狩役所の司事井上弥吉は張碓、和宇尻の漁主西谷嘉吉の仁侠に依り、レブンスカ川上流の杣小屋に難を逃れ一冬を過ごし翌年平定後青森へ船にて歸つたが、この脱走軍來襲の報は朝里漁民をして小樽内騒動以上に驚かし中には難を逃れて札幌辺まで行つた者もあったと云ふ。

この乱は翌二年五月に平定した。

明治二年

會津降伏人の滞留

(1869年)

朝敵たりし會津藩は明治元年九月降伏し斗南藩に引渡しとなり、降伏人一万七千人の内

五千人は斗南に、残一万二千人は箱館府の権判官堀眞五郎東京にあつて大村益次郎の會津降伏人の處置に付問ふに堀はこれを樺太開拓のため派遣せられべくその前に石狩・小樽辺へ一先ず送致すべきを可とすと献言した。

この結果官船を以つて三回に亘り、第一回は二年九月、第二回同年十一月、第三回十二月北海道に向ひ朝里、熊碓の濱に上陸した。

驚いた村人、これを開拓使に急報、当時兵部省と開拓使とが意見の相違があつたので、この降伏人の處置について開拓使は一向便宜を與へなかつた。そこで已むなく、熊碓から錢函までの漁家に、二人三人と止宿せしめ、餘は勝納、信香の民家にまで宿泊せしめた。

而して渡樺の機を待つたが樺太開拓使は明治四年八月廢せられて北海道開拓使に合併したので遂に渡樺すること得ず、種々兵部省と開拓使との間に合議を重ねた結果、黒田開拓次官の命に依り四年春余市に移住せしむることとなり漁家の浪人一同引揚げ、その結果余市の黒川、山田の二村がこの降伏人に依つて形成せられた。

尚降伏人が小樽内滞留中無事に苦しみ漁民の子弟を集めて讀書の指南をしたのが小樽内寺小屋式教授の始である。

數年後、量徳學校の校長たりし志賀熊太郎、熊碓校長たりし上島川兵二、朝里寺子屋教師渡辺竹八等何れもその降伏人であつた。

岩内郵便局長たりし築瀬眞精もその一人である。安孫子孝次の父倫彦もその一人。一柳

直枝の父平太郎もその一人。

明治二年

島判官の着任

(1869年)

明治二年八月二十五日東久世通禧が二代目長官に任ぜられたが、北海道の三地方にそれぞれ判官を任じてこれが統治を委した。即ち岩村通俊を箱館に、島義勇を札幌に、竹田信順を宗谷に配置、中でも島は主席判官であり札幌本府開設の大任を帯びてゐた。即ち島は十月一日箱館を發し、同月十二日錢函に着任した。錢函の白浜園松宅を以って假役所と定め、寿都から浜益までの十二郡を管轄した。而して十一月十日、島は騎馬で雪を犯して札幌に入り、本府建設を督励した。

茲に特筆すべきは、島は東京を發する時神祇官に請ひて北海道開拓の三神（現札幌神社神靈）を請けて着任したので同年十二月三日錢函仮役所閉鎖まで札幌神社の神靈は錢函に頓宮あらせられたのである。島の経営は規模廣大、而も獨斷專行の嫌あるので周囲の忌諱に触れ、三年二月お召に依り帰京、四月大學少監に轉じたが、その後任には四年一月岩村通俊が着任した。

明治三年

小樽郡の町村

(1870年)

四月現在、信香、信香裏、金曇、芝居、新地、口場、勝納、山ノ上 計八町

朝里、熊碓、張碓、錢函 計四村

大年寄 船木忠三郎 (十四年二月忠郎と改)

中年寄 苗保儀三郎

同 中野親太郎

名主 五十嵐清蔵 (朝里)

同 堀内儀兵エ (熊碓)

戸數 總數 六〇二戸

人口 同 三、一六九人

大年寄は苗字帯刀を許され、且つ乗鞍使用を許され、中年寄は片腰を帶ぶ。村には頭取及

百姓代を置く。

朝里 頭取 清蔵 小頭 三太郎

百姓代 治五右エ門、利兵エ、弥兵エ

金曇||こんたん 醜業悪事の「魂胆」ととられ語感が悪いので、旧幕時代、箱館奉行所の宇津木某により、「こんどん」と読み替えられ、触れ書きされたが、流布しなかった (小樽市史)



明治三年

朝里神社の燭台

(1870年)

大平山碑を建立した發願者柴田長太郎は、郷里秋田へ歸國するに当り鍛冶職の自家製を以って蠟燭立を作り、之を朝里神社に奉納した。それに定山法印に依嘱して左の一首を刻した。

千はや振る 神の恵みの 道そ海

前はま惣て 鯨の群きくる

明治五年

第二次道路開鑿

(1872年)

安政四年の恵比須屋道路は山間溪谷を迂回したものでその難澁甚だしきものあり。

開拓使は札幌・小樽間によりよき道路の開鑿を必要とし、明治四年錢函より三樽別まで開鑿し、五年五月星川龍蔵及浮田善助の請負を以って、錢函から海岸沿ひで小樽市街まで延長三里幅員二間の道路を開鑿した。

この経費二萬八百十七円を要した。

これが札幌間の第二次道路開鑿である。

三樽別Ⅱ路順に手稲―銭函追分―三樽別―銭函とある。サンタロベツⅡ手稲山の北面、通称八百高地の奥から発し富丘地区に下る三樽別川からきている。現在の札幌市手稲区富丘付近。

明治五年

戸長制度実施

(1872年)

明治五年四月、朝里村に事務所を置き開拓使の命に依り戸長、副戸長の制度となった。

戸長は河原勝興、副戸長は亀谷藤次郎、町村用係にも亀谷藤次郎が任命された。

河原勝興の前歴、明治八年樺太千島ノ交換問題惹起し、黒田清隆、榎本武揚等露西亞に赴き談判の結果、樺太を彼に渡し我に千島を得たり。この時樺太在住の邦人三三二名を函館、小樽に送還、その小樽奥沢に帰着せし者の内に、河原勝興、東 善八、友成某等あり。戸長就任の年代符合せざるは、戸長制度実施後三年目に戸長に推舉任命せられたるもの乎。

河原は斯くして明治三十五年二級町村制実施まで戸長を續けたり。

樺太千島ノ交換問題Ⅱ1875年の千島樺太交換条約、帝政ロシアとの間に交された。

明治五年

札幌間電線架設

(1872年)

この年札樽間に電柱を建て電信線を張った。村民一同針金にエレキが通じ、遠隔の地に話を通ずる文明開化に驚異の眼を睜った。

この年十月、大年寄船木忠三郎（現港町局長祖父）が信香町十番地で小樽郵便取扱所を開始した。

小樽郵便局の前身である。

明治八年

果樹苗の配給

（1875年）

黒田開拓長官は米國より果樹苗を豊富に輸入し、開拓使をして小樽郡・島郡に林檎、櫻桃其他の果樹を數千本無料給與せしめた。

即ち、自作農には櫻十本、葡萄十本、林檎十本宛、土地を所有すれども他人に貸與してゐる者には前記の半數を植樹せしめた。

この内、朝里山の上には今日尚その果樹の残り居るものあるべしと思ふ。

植樹したる土地は現在三栄工場敷地、榎所有地等である。

これ朝里に於ける果樹の元祖である。

榎所有地Ⅱ新光 二丁目、朝里自動車學校上手付近、サクランボが植えられていたという（能登利喜雄氏談）

明治九年

朝里小學校の濫觴

（1876年）

朝里の人家も漸く増加の一途を辿つて来た。従つて子弟の教育問題も自然擡頭し、從來は小頭五十嵐清藏宅の一室を借り渡辺竹八をして寺小屋式教授をして来たが到底斯くては収容しきれないので村用係亀谷藤次郎が代表して教育所設置に付願ひ出た。

教育所取設之儀ニ付願

小樽教育之儀厚く御世話被為在追々入學之者も多分に有之幼稚之男女等追々風俗も正敷相成候処村々に至りては是迄の姿にて今日の御趣意を拝承仕候へは実に不相済次第去邇々小樽教育所へ入學為致候へは道路隔折幼少之者別而歩行難澁之義に御座候に付此度村内一同申合せ別紙圖面二百坪に五間に七間の教育所一棟取設仕度尤も地面建家入費等者追而成功之上詳細に取調申上可仕候へ共諸入費等の儀は總而民費を相募り不取締無之様仕度何卒願之通り御聞届被成下度此段以畫付奉願上候

以上

明治九年七月

朝里村用係

亀谷藤次郎

小樽全權 北川誠一 殿

右の願意が翌八月認可となり、朝里村十七番地に間口十間奥行二十間の敷地を五十嵐清蔵より三百円で購入、三十五坪平家建の教育所が竣工し、十一月に開所式を舉行、初代校長は東野義秀と云ふ。

濫觴||らんしょう、物事のはじまり、起り。

朝里村十七番地||現朝里1丁目2番、ちどり公園、平成九年開校百二十年記念事業として「朝里學校教育発祥の地」の碑が建立された。

明治九年

三條太政大臣の通過

(1876年)

明治天皇の厚き思召によりその命を受けたる太政大臣三條実美公は、参議寺島宗則、同山縣有朋、同伊藤博文、元老院幹事陸奥宗光、權大史巖谷修、土木權正石井省一郎外四十余名を引具し北海道開拓状況視察のため八月二十日船にて小樽に上陸、翌二十一日山駕籠に乗って熊碓長昌寺坂を下り、海岸通りを朝里に着、村民の迎送に目禮を與へつ、一路札幌に向った。

尚前夜小樽に旅宿斎藤喜五郎邸に小樽の文人墨客が集ひて「小樽八景」の歌合せを閲

覧に供した。

その内に朝里を詠んだ歌あり

朝里落雁

菅谷則男

秋されは 朝里の浦の月影を

つはさにかけて 落つる雁金

小樽の人々が湾中八景を詠みかはしたるを聞きて

三條実美

君が代は 蝦夷か千島も 敷島の

道開けりと 聞くぞ嬉しき

長昌寺坂Ⅱ現桜1丁目、長昌寺脇の平磯公園に至る坂

明治初年

朝里山の上中央道路由来

現在朝里山の上即ち新光町中央幹線とする道路は、往古この山の上一帯は芒の原であった。

朝里川上流右岸の山岳に棲む蝦夷鹿の大群は前面の海上を恋ひ、この芒の原を掻き分け

て一直線に海岸まで来り何らの餌物も見当らずそのまま山へ引返すを例とし、そのために芒原に鹿の通路が出来たのを和人が入稼ぎするやうになって以来、山へ漁場用の 楳皮剥ぎ或は蔓物を採りに行く漁夫がこの鹿道を経由する為めいつしか人道となったものである。矢別沢奥にある鹿ノ踊場と云ふ箇所は果たして鹿が棲息してゐた所なるや否やは眞偽明かでない。

新光町中央幹線並道々1号線（小樽定山溪線）

鹿ノ踊場、矢別沢並ヤベツ沢、現在新光五丁目と朝里川温泉二丁目界で矢別沢川が流れ砂防ダムが築かれている。

楳並しな、科木（しなのき） 「しな」はアイヌ語で「縛る」の意、菩提樹と同類（広辞苑）

明治十二年

### 第三次道路改修

（1979年）

開拓使は札幌小樽間の交通に対し革新的進歩を為さしめんと、この間の最も難所とする銭函小樽間の道路改修を企劃し、米國よりの雇技師クローフオルドをして担当せしめ四月着工、十一月竣工、此工費四萬四千〇四十八円を要した。

而して明治九年以来札幌馬車會社々長石川正藏をして札幌銭函間客馬車運輸を許可したが、更に銭函から小樽まで延長せしめ、札幌小樽間客馬車が運行され大いに旅客の便

宜を計った。

札幌錢函間	大人	二十錢	小人	十錢
錢函小樽間	同	十九錢	同	九錢
札幌小樽間	同	三十九錢	同	十九錢
錢函手宮間	同	二十三錢	同	十一錢
札幌手宮間	同	四十三錢	同	二十一錢

この馬車運行は僅か一年ほどでその道路面が鉄道敷設と云ふことになり、中止の運命となった。

明治十二年

(1880年)

#### 札幌間鉄道開通

幌内炭鑛より搬出する石炭を石狩川を利用して小樽へ回送することは時間的にも経済的にも不利益なのでクローフォルドはこれを鉄道輸送にすることを建議、それには札幌間鉄道敷設を六項目を掲げて長官に建策したので、黒田長官は一切をクローフォルドに任することとなった。

明治十二年十二月廿五日附を以って、工部省から幌内手宮間鉄道敷設の件許可あり、翌年一月八日熊碓トネル工事を以って最初の着工となった。



然しこの鉄道敷設は前年に車馬道開鑿のため進捗すること甚だしく十月には軌條を敷き、十一月十八日に手宮から札幌まで開通、同月二十八日を以つて營業開始となつた。

当時の機関車、一、義経号 二、弁慶号 三、比羅夫号、四、光國号 五、信廣号、

六、静號、一日に二往復、冬期は一往復とした。

汽車賃は

自朝里 至住吉 十錢

〃 〃 手宮 十五錢

〃 〃 錢函 十八錢

〃 〃 輕川 三十錢

〃 〃 琴似 三十八錢

〃 〃 札幌 四十五錢

初代 朝里駅長 小黑廣弥

二代目 〃 高橋三郎

三代目 〃 木村三郎

朝里駅は当時フラッグ、ステーションとて二間四面の小屋に過ぎず歩廊もなく、赤旗を振つて停車させ踏台を以つて乗降させたものである。

この鉄道敷設は道路上を利用したので沿線の住民非常に激昂し、この旨長官に陳情した

ので、明治二十二年北海道炭鑛鐵道株式會社の経営となつた際、道廳は左の三條件を附し

たのであつた。

- 一、朝里錢函間は人民の線路通行を認むること
- 二、十ヶ年間農産物輸送は運賃半額とすること
- 三、移住民は無賃とすること

右の條件は國有鐵道となるに及んで無効となつた。

輕川川がるか、現札幌市手稲区手稲

明治十四年

明治天皇御巡幸

(1881年)

明治大帝には北海道の開拓状況及民情御視察のため七月三十日東京御發輦、北白川宮能久親王、左大臣有栖川宮熾仁親王、大隈、大木両參議、徳大寺宮内卿等供奉八月二十七日青森御着、青森より扶桑艦に乗御同月三十日午後五時小樽に入港、五時三十分御上陸、同六時四十分御召車開拓使號に御乗車手宮駅御發一路札幌に向はせられた。

沿線各戸國旗を掲げて御奉迎申上げた。この日朝里小學校長日森藏之助は生徒五十余名を引率して手宮の波止場まで御奉迎に出頭した。

明治十五年

(1882年)

### 土地所有權の争ひ

朝里山の上の平坦地が沃野なることを確め、農耕地と為さんとして永住の決心にて農家を定めしは、能登國羽咋郡北吉田村の出身青山三蔵と云ふ者、續いて同郡中甘田村大島出身の播磨五右エ門（一名寅吉と称す）、末吉村出身新谷久助、福井縣坂井郡春江村隨應寺出身江上宇平等である。

尚逐年農家が増加す。この時土地区劃を為し、耕地整理のため戸長河原晴興、之が処分權を有し居りしたため漁業者との間に所有權争ひ生ず、即ち、山の上の崖縁より平坦地全部を青山、播磨、浜田某の三名に対し山の上一帯の土地を下附せられんことの出願をしたりと聞き込みたる漁師側は、然る時は鯨の粕乾場もなきこととなると驚愕唯ならず、總代亀谷藤次郎を先頭に北川郡長に歎願書を出し、北川郡長の計ひで現在國道となつてゐる所は以前三間道路あり、その道路より浜手は漁家の粕乾場及自家用野菜地として農家に拂下げずと決定してこの争ひは落着せり。されど農家の既墾地はその者に拂下げたり。

右青山三蔵は山の上の草創人なりしも、明治三十九年郷里へ帰り明治四十三年七十一才にて死亡せり。

能登國羽咋郡北吉田村＝現在の石川県羽咋（はくい）郡志賀町北吉田

中甘田村、末吉村＝現志賀町甘田、志賀町末吉

明治十六年

朝里外三ヶ村戸長役場設置

（1883年）

十五年二月開拓使を廢し、函館、札幌、根室の三縣を置き、十六年三月初里外三ヶ村（熊碓、張碓、錢函）戸長役場を朝里村に置き、河原勝興依然戸長となる。

明治十九年一月三縣制度を廢し北海道廳を置く。

明治十六年

小樽港の境界

（1883年）

小樽港の境界は四月朝里村カモイコタンの岬端から高島村厩の岬端に至るまでの線内と定められた。

この年十月十五日から日和山燈台が點燈された。

明治二十三年に至り熊碓村平磯岬から厩町岬に至る線内を小樽港と改定せられた。

明治十六年

山の上農家入地

(1883年)

青山三蔵、中田與作、播磨寅吉、江上宇平、牧田甚左エ門等農家入地

明治十八年

朝里郵便取扱所開設

(1885年)

朝里村は小樽郵便取扱所の扱区域であつたが、この年朝里に郵便取扱所を開設した。  
名称を郵便受取所と称した。

明治三十一年十一月五日朝里郵便局と改め業務開始をした。

明治二十三年

小樽漁業組合設立

(1890年)

明治十九年小樽、高島、両郡の業者相談の上両郡に各業組合を設けたが、二十三年に至り二組合を合併して小樽高島漁業組合と改称した。

翌々二十五年更に名称を小樽漁業組合と変更した。

明治二十四年

共成朝里精米所開業

(1891年)

京坂與三太郎を社長とする共成株式會社では朝里川畔に水力に依る精米所を経費七十五萬円を以つて建設、鐵道より岐線を敷き朝里駅より一日一回乃至二回貨車の出入りを為さしめて業務を運営した。

朝里精米所の所長は齊藤富次郎。使用労務者五十余名、一日の最大精米能率千二百俵、挽臼百二十臼。

翌二十五年九月五日の朝里川増水にて精米八百三十俵流出したることあり。

更に明治三十四年五月十七日失火にて全焼す。

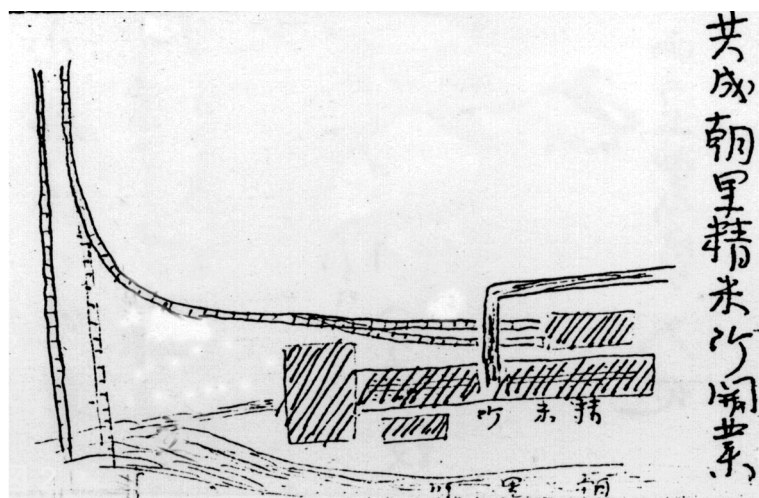
この精米所は大正三年に至りて閉鎖、同五年建物取毀したり。

共成朝里精米所 跡地は河口から朝里川をさかのぼり、鐵道橋、国道五号線架橋をくぐり左、右岸である

明治三十二年  
(1899年)

小樽区制実施

小樽郡の各町は逐年戸数増加し、明治三十二年十月には戸数八、五〇〇戸、人口六〇、



小林  
廣  
作圖

〇〇〇人を算するに至った。

依つてこの年区制を実施して熊碓村平磯岬より高島郡厩町岬の区域を以つて小樽区とした。それがため小樽郡はオコバチ川から平磯岬までの区域を小樽区に割譲したのであった。

明治三十二年

(1899年)

朝里外三村衛生組合設立

二月二十一日熊碓村、七月二十一日朝里村、七月二十日張碓村、七月十五日銭函村に各々衛生組合が設立された。

明治三十三年

(1900年)

朝里村農會設立

九月一日朝里村農會設立、村長をして農會長とした。  
この農會は村が小樽市に合併後小樽市農會と合併した。

明治三十五年

(1902年)

二級町村制実施

四月一日を以つて朝里外三ヶ村を朝里村とし二級町村制を実施した。初代村長八幡



貞。

六月一日実施した村會議員選舉には左の十名が当選した。

内田末作、鶴谷惣七、北田章吉、片岡太市、高橋三郎、山崎弥八、金谷與助、鹿内元吉、井口岡次郎、岩館吉太郎

尚、朝里村の四月一日現在住人は左の百四十戸であつた。

斉藤富次郎 亀谷勇吉 佐藤常三郎 徳光喜八 樽見善作 佐藤久助

原田清作 高橋三郎 片岡太市 附家平次郎 秋田利八 山口玉吉

渡辺惣太郎 今 三之助 久家文七 福田清吉 金谷玉蔵 青山三蔵

松浦庄蔵 徳光清太郎 伊藤留之進 盛生幸作 徳光宇三郎 港 ムメ

能登吉蔵 町田外也 秋村久五郎 寺田孫右工門 佐々木正善 小松市郎

徳光竹三郎 花田勘太郎 福士忠吉 木村松三郎 村田石蔵 岩城福松

中山竹次郎 中山吉三郎 島田權兵衛 河原勝興 小屋端清三郎 内田甚作

金子富作 高橋音太郎 福田傳治 泉 秀朔 木村弟吉 永山弥右工門

新谷久助 中田與作 三津孫三郎 枋尾孫十郎 品田長次郎 寺島幸太郎

沖野庄吉 菊地音吉 北田吉松 石橋喜兵衛 太田蕩一郎 丸井由松

奥山八太郎 渡辺寅吉 内山久八 矢沢重次郎 上杉善兵衛 二木兼松

花田富太郎 小堀宗太郎 金谷丑松 吉岡吉三郎 戸澤弥吉 木村三郎

谷田和十郎	吉田吉太郎	北風幸太郎	山田要松	高橋傳次郎	柴田末三郎
北川藤四郎	高橋銀作	浪岡與太郎	瀬川藤四郎	今 平助	後藤嘉助
村上リセ	神田岩吉	今 三太郎	沖藤熊吉	山口富太郎	木村栄太郎
本間利作	林多左エ門	大平太三	牧田甚左エ門	斉藤寅吉	岡本文助
江上宇平	井原仙之丞	徳光林蔵	鷺田筆五郎	荒木六太郎	徳光常太郎
江戸井ミヨ	徳光キヨ	五十嵐千代蔵	渡辺由松	稗田市太郎	秋元岩吉
佐々木ヨシ	鶴間善六	畑中善四郎	古川茂作	高根栄助	渡辺サト
本間幸太郎	高橋吉太郎	佐野竹三郎	神田長次郎	藤崎万右エ門	
結城重兵エ	小沢石松	高橋直三郎	砂賀永八	鎌田久治	森 市太郎
播摩甚六	小林與三太郎	笠原虎三	小林宇作	松永松右エ門	澁谷善之助
水間忠右エ門	藤本吉太郎	和田惣八郎	横川與三太郎	榊原久太郎	石井口政
前谷三次郎	牧田佐太吉	谷 民三			

以上百四十戸

明治三十五年

量徳寺朝里説教所開設

(1902年)

この年十月片岡太市、鷺田筆五郎、小林與三太郎等の奔走で小樽量徳寺岡崎住職の諒解

を得、朝里駅前には量徳寺朝里説教所を建立した。

初代の説教所主任は豊富英敬であった。

明治三十六年

朝里巡査駐在所設置

(1903年)

小樽警察署では朝里村に巡査駐在所を設置した。

場所は荒浜であった。

荒浜 朝里1丁目1番地

明治三十六年

小樽水産組合設立

(1903年)

小樽□業組合はこの年小樽水産組合と変更し、従前通り事務所を量徳町に置いた。

この水産組合は大正十年の水産會法実施により小樽水産會と改組されるまで存続した。

明治三十七年

軍用道路開鑿

(1904年)

日露の風雲急を告げたるにより道廳では錢函小樽間の道路らしき道路なきを以つて萬一の場合に備へこの年より翌年に亘り道路を開鑿した。これを軍用道路と称し後國道四号線と称した。

明治三十七年

(1904年)

### 第二回の村議改選

六月一日第二回の村議改選では左の十名が当選した。

内田未作      鶴谷惣七      山口玉吉      片岡太市      高橋三郎      山崎弥八

久末又五郎      竹田福太郎      西辻甚太郎      林      與惣吉

明治三十七年

(1904年)

### 日露戦々死者

日露開戦となり、二月十日宣戦の大詔渙發同月十一日浦塩艦隊が我商船奈古浦丸を福山沖で撃沈、全勝丸は辛うじて福島海岸へ避難した事件あり。

小樽の住民や朝里の村民大恐慌を来して一家を擧げて札幌方面へ遁走、後日の笑ひ話になった。然しこの年から翌年へかけての戦争熱は大したものであった。

朝里四ヶ村から各々一名宛の戦死者が出た。十二月一日、朝里村徳光石松(歩二六、軍

曹)、十一月三十日旅順赤坂山の戦闘に負傷、朝家屯、第一師團野戦病院に入院、この日傷死す。

十二月二十三日熊碓村高山専蔵(歩二五、一等卒)旅順渡辺山の戦闘にてこの日戦死す。

明治三十八年三月二日張碓村西川末太郎(歩二五、一等卒)達子堡の戦闘にてこの日戦死す。

同年四月三日銭函村二部寅吉(野砲七、一等卒)三月三日達子堡の戦闘に砲創を受け野戦病院に収容、この日遼陽兵站病院にて傷死す。

明治三十七年

#### 遼陽陥落提灯行列

(1904年)

日露の大戦は連戦連勝が國內の合言葉であった。難攻不落の旅順が落ちたら提灯行列を行ふことがその筋からの内命であったが、仲々落ちない。遂にしびれを切らした國民は九月四日遼陽の陥落に依つて小樽でも朝里でも賑やかな提灯行列を催して祝った。

明治三十九年

#### 第三回の村議改選

(1906年)

六月一日第三回の村議改選では左の十名が当選した。

明治三十九年

(1906年)

火災

六月二十一日、仁木兼松方ヨリ出火小松外五戸焼ク

明治四十一年

(1908年)

第四回の村議改選

六月一日第四回の村議改選では左の十二名が当選し、×印の辞任で補欠選任があつた。

内田末作    阿部安藏    福士忠吉    速水豊次郎    加我峯太郎    山崎弥八

×金谷與助    久末末吉    ×秋田栄吉    久末又五郎    ×林與惣吉    林   與市

補 佐藤留吉    補 彦井彦兵エ    補 木村與一

明治四十二年

(1909年)

造林會社との山争ひ

軽川に本社を有する北海道造林合資會社では朝里を圍む山林六千町歩の拂下を道廳に出

願したるを聞きたる村民は、将来の燃料問題上閑却視するを得ずと、村長北條瀧三郎を擁して社会問題とし、尔後小樽支廳及道廳並に造林會社と折衝を重ね、遂に翌四十三年三月二日造林會社支配人近藤新太郎は左の三條件の請書を小樽支廳長河屯三郎に提出し、その結果同年六月十一日附長官から四千余町歩成功期間二十ヶ年として拂下の許可を受けた。

一、賣拂地の立木を新材の目的で賣却する時は先ず朝里村民の自家用を時價に應じて賣却すること

二、造林事業に要する人夫は特別の人夫の外可成村人を雇上ぐるること

三、賣拂許可の上は一町歩に付六錢の割で朝里村基本財産に寄附すること

右の結果、朝里村民は毎年造林會社より燃料用薪の拂下を受け冬期になると山へ薪伐りに登ること數年に及び、ある年は春先になると朝里川へ流送して出すこともあった。

一方基本財産への寄附は明治四十四年度から毎年二百円宛を寄附し、將來反別割を課するときその課税額が二百円を超へるときは寄附を打切ることとしたが、この課税は大正八年を以つて超過することになったので大正九年度から二百円の寄附は打切られた。

明治四十二年

朝里小學校の移築

(1909年)

小學校令の改正で義務教育が六年制度となったため、從來の朝里小學校は二學級では生

徒を收容し能はず茲に學校改築の案となり、北條村長また積極的改築に努めたる結果、朝里山の上の片岡太市及彦井彦兵エ両人の所有地を買収し、六月着工、九月五日上棟式十二月十二日落成祝賀會を舉げ三學級の新校舎が竣工した。

時の校長町田外也。

明治四十三年

#### 第五回村議改選

(1910年)

六月一日第五回村議改選では左の十二名が当選した。失格者の後には補欠選任があつた。

内田未作	阿部安藏	佐々木直規	福士忠吉	片岡太市	速水豊次郎
笹原文平	中西寅市	伊藤專四郎	補 木村安吉	補 鳥瀬常吉	補 斉藤平八
失 松川勘太郎	失 宮川連藏	辞 木村與一			

明治四十三年

#### 朝里神社の奉遷

(1910年)

從來朝里山の上の農家が崇敬してゐる神社に軍用道路より奥の方に住吉神社、下の方に天満宮があつた。同じ農村で祭礼を別々にするのは穩当でないとして農民相談の上この神社を



合併し、天満宮の位置に社殿を改築したのは四十二年の十月二十一日であった。

然るに内務省の無格社神社の整理は朝里村の各無格社に及び、總てこれを村社に合祀の相談があり、結局天満宮と村社とのみ合祀、その他はそのままとして置くこととなった。

そこで村社は現在町田校長頌徳碑の位置にあったのを社殿腐朽の爲め、前年新築した天満宮に奉遷することにしたものであり、九月二十日を以つて奉遷完了、その日を以つて例祭日とした。尚從來村社稻荷神社と云ふ社号を村社朝里神社と改称することとなった。

移転許可と名称変更は 北海道廳指令第6978號（大正4年10月15日）で、移転登記は大正5年2月24日第656號で寄附者は片岡正太郎（太市）。このため社殿が出来たのが明治42年で、合祀は時代が下つた大正5年ごろと考えるべきか。

明治四十三年

後志支廳設置

（1910年）

三月、小樽、岩内、寿都の三支廳を一括して俱知安町に後志支廳を設置、朝里村はその管轄となった。

明治四十三年

朝里在郷軍人分會設立

（1910年）

在郷軍人中帝國在郷軍人會の分會設立に奔走する者あつて、この年設立會長に村長北條瀧三郎を推したが、村長轉任後翌明治四十四年七月、正式に分會として加入、分會長に小松市郎、副長に早坂英憲就任した。

この分會は連續三十五年に及び太平洋戰爭終戦後解散した。

二代分會長 新田幸一、三代西川政義、朝里村が小樽市と合併して分會も分離し第十分會、第十一分會となり第十分會（朝里熊碓）は分會長松永初太郎、第十一分會（張碓錢函）は分會長戸田太市であつた。

尚朝里分會の分會旗の名記は当時の陸軍次官田中義一の揮毫であつた。

明治四十三年

（1910年）

札幌間鉄道複線開通

前年度より工事に着手した札幌間の鉄道複線はこの年開通し朝里、張碓間のみ張碓隧道未完成のため翌四十四年開通した。

明治四十四年

（1911年）

東宮殿下御通過

八月二十五日午前九時三十分東宮殿下嘉仁親王は東宮太夫波多野直敬、侍従長一條實輝、

武官長村木雅美、東宮主事馬場三郎等の供奉員を従へさせられ、特別列車で朝里を御通過

あらせられた。

殿下御年三十三、陸海軍中將であらせられた。

東宮殿下嘉仁親王Ⅱ後の大正天皇

明治四十五年

#### 第六回村議改選

(1912年)

六月一日第六回村議改選には左の十二名が当選した。

阿部安蔵 佐々木直規 中祢義光 小松市郎 斉藤平八 鳥瀬常吉

竹田福太郎 笹原文平 深瀧富次郎 伊藤専四郎 速水豊次郎 石井幸太郎

明治四十五年

#### 改元

(1912年)

七月三十日明治大帝崩御九月十三日御大葬の当夜朝里小學校校庭を遙拝場として村民一

同嚴肅裡に遙拝式を舉行した。

大正二年

枉里川氾濫

(1913年)

八月二十七日二十八日の豪雨にて枉里川氾濫し堤防決壊、家屋流出、小山兼吉流死、銭  
函川増水のため二十四名の死者あり。

大正三年

第七回村議改選

(1914年)

六月一日施行の第七回村議改選には左の十二名が当選した。

内田末作	彦井彦兵エ	片岡太市	小松市郎	西谷與四郎	鳥瀬常吉
久末末吉	多羅尾光男	深滝富次郎	伊藤專四郎	速水豊次郎	藤村栄作

瀧川原文ではこれ以降「瀧」は「滝」と記載されている

大正三年

第一次欧州大戦

(1914年)

六月二十八日、塞國の一青年懊國皇儲暗殺に端を發したる第一次世界大戦に八月に至り  
我國も独逸に対し最後通牒を發しこれに参加、青島戦開始さる。

塞國＝セルビア

大正四年

(1915年)

たらば蟹の大漁

海軍は加藤定吉中將、陸軍は神尾光臣中將これに向ひ、十一月七日一週間の總攻撃の後遂に陥落せしめたり。

朝里に於ては十一月九日盛大なる提灯行列を催す。日露戰遼陽陷落以來の提灯行列なり。

一月下旬より二月上旬にかけ朝里近海たらば蟹の豐漁にて貨車にバラ積として輸出す。十錢に雌蟹十匹の安價なり。

大正五年

(1916年)

京都大相撲興行

京都大相撲の脱走力士有馬山、大貫、一の矢、櫻川、松の矢、友碓、越の海、東山其他一行五十名、五月十一日十二日の二日間朝里駅前の高台にて興行、勸進元は樽見重兵衛、星川虎雄なり。朝里で大相撲興行はこれで二度目なり、今回の木戸は二十錢であつた。

木戸(銭) Ⅱ入場料

大正五年

第八回村議改選

(1916年)

六月一日施行の第八回村議改選に左の十二名が当選した。

内田末作 小野義之助 片岡太市 小松市郎 阿部豊太郎 浪花兼吉  
久末末吉 多羅尾光男 深滝富次郎 笹原文平 速水豊次郎 松下與作

大正六年

朝里に電燈點す

(1917年)

小樽電気株式會社では前年より配電工事を起し、この年一月一日より下通り、三日より山の上に電燈を點す。

大正七年

第九回村議改選

(1917年)

六月一日施行の第九回村議改選に左の十二名が当選した。

内田末作 斉藤平八 小野義之助 小松市郎 朝永尋三 久末末吉

山崎吉太郎　深滝富次郎　笹原文平　伊藤專四郎　加我峯太郎　多羅尾光男

大正七年

山の上青年俱樂部建設

(1918年)

朝里山の上青年達は集會場がなく何事に依らず不便なるため、青年團長新谷久五郎率先して俱樂部建設を議し、寄附金を得てこの年七月十一日に朝里神社横に建設した。  
これを以つて青年のみならず山の上部落民の集會所とした。

山の上青年俱樂部＝朝里町民會館を経て平成14年、現在の新光東會館となった。

大正七年

開道五十年博覽會

(1918年)

開道五十年記念北海道大博覽會は第一會場を札幌中島公園に、第二會場を小樽南浜町に八月一日から五十日間開催、その記念式は八月十五日第一會場で舉行した。この博覽會に出品した者の内受賞者は名譽金牌二十九、金牌百三十一、銀牌五百五十八、銅牌千〇十六、褒状二千三百十八であったが、その内朝里村からの出品で受賞したのは左の通りであった。

銀牌　葱

朝里　小林與三太郎

同	身欠鰯	熊碓	阿部豊太郎
銅牌	黒大豆	朝里	前田清左エ門
同	種牡丹	錢函	多羅尾 時
褒状	黒大豆	熊碓	加藤三右エ門
同	西瓜	同	熊谷九之七
同	甜瓜	同	安達菊松
同	葱	朝里	水間初五郎
同	鰯搾粕	同	斉藤平八
同	同	同	久家喜平
同	同	張碓	久末末吉
同	身欠鰯	同	川村利助
同	同	同	酒井元三郎

右生産品の内朝里村の葱は特に全道に名あり。この沿革は明治二十年頃青山三蔵、驚田筆五郎等東京千住より葱種を購入して栽培したるもので朝里山の上の黒土がこの葱の生育に合致したるため優秀なる産物となつたものである。



大正七年

巡查駐在所移轉

(1918年)

荒浜にあつた巡查駐在所は十一月旧朝里神社々地へ移築した。

大正七年

西比利亞出兵と米騒動

(1918年)

前年に露西亞のロマノフ王家を倒壊させて労農政府となり、過激派は漸次蜂起して西比利亞一帯に動乱勃發、日本の權益を犯さんとしたので、我が廟議を決定して西比利亞派遣軍を編成、大谷喜久藏大將を司令官に由比光衛中將を参謀長とし姫路、小倉、名古屋の各師團に動員令降下、前年来滿州駐箭の七師團もこれに加はり、彼の過激派を追討、東はハバロフスクより黒龍江に沿ふて遡りブラゴエチエンスクを占領、西は滿州里を越えてオノン河を渉りネルチンスクからチタに及んで、漸く敵を一掃することが出来た。

この西比利亞事變の最中に米價騰貴に因る國民の騒動が勃發した。

それは越中滑川の漁師の女房連が一揆したのに端を發し、各地に暴徒の蜂起あり。焼打事件から死傷者も出たので軍隊出動となり、その結果寺内内閣の總辭職とまでなり、皇室から御内幣金三百万円、國庫から一千万円を支出して米價の調節を計ると共に富豪から多額の寄附を為さしめて、貧困者へ米の廉賣を施すこととなった。

朝里村に対して御下賜金二百五十六円の割當ありこれを戸數割二十五等の内二十三等以下の方に對し廉米券を交付してその救済をした。

大正九年

#### 第十回村議改選

(1920年)

六月一日施行の第十回村議改選に左の十二名が當選した。

内田未作	阿部徳太郎	小野義之助	斉藤熊蔵	朝永尋三	久末末吉
加我峰太郎	深滝富次郎	笹原文平	伊藤專四郎	鹿内元吉	藤村栄作

大正九年

#### 第一回國勢調査施行

(1920年)

第一回の國勢調査はこの年十月一日午前0時現在を以って施行された。

その前日九月三十日朝里各村で提灯行列を行つて宣傳した。

調査の項目は氏名、世帯に於ける地位、男女の別、出生年月日、配偶の關係、職業及び職業上の地位、出生地、民籍別又は國籍別の八項であり朝里村では十七区に分ちてそれぞれ調査員を任命。朝里村の國勢調査事務係主任は庶務主任の小林廣であつた。

調査の結果は左の通りであつた。

世帯	人口	男	女
熊碓	二〇四	一、一〇八	五七一
朝里	一八四	一、〇〇一	五〇八
張碓	一二七	六六四	三一五
錢函	三四七	一、七八二	八八九

大字朝里村の調査員は町田外也、小松市郎、斉藤平吉、木村栄七、小野義之助の五名であつた。

國勢調査Ⅱ一九二〇年を第一回とし、以後五年毎に施行。

大正十年

朝里海水浴場開設

(1921年)

新谷末五郎の出願で小樽警察署の許可を得朝里駅前浜一帯に海水浴場を開設した。この海水浴場は二三年繼續して終熄した。

大正十年

朝里郵便局改築

(1921年)

この年八月朝里郵便局が改築され、十一月二十一日から公衆電話の開通があつた。同月二十三日朝里小學校で開通祝賀會を開いた。

大正十年

#### 第一回朝里敬老會開催

(1921年)

福田ヲト子、高橋安惠等の主宰する朝里婦女會主催の下に第一回の敬老會を催したのは八月十六日であつた。この日最高年令者八十六才の町田シホ、女、最低年令者七十才の新谷久助等二十九名を小學校へ招待し盛會を極めた。

この敬老會は爾後数回開催された。

へ||原文には無い

大正十年

#### 第一回朝里聯合青年團大會

(1921年)

九月十八日朝里小學校庭で第一回の朝里聯合青年團大會を開催し競技に勝敗を争つた。團長は村長大湊清樹、副團長は錢函校長椎名恕助であつた。この大會は爾後数年續いた。

大正十一年

第十一回村議改選

(1922年)

六月一日施行の第十一回村議改選に左の十名が当選した。

内田未作      阿部徳太郎      小野義之助      朝永尋三      竹田福太郎      久末未吉

鹿内元吉      深滝富次郎      藤村栄作      井口亀次郎

大正十一年

攝政宮殿下御通過

(1922年)

攝政宮裕仁親王殿下本道行啓は明治四十四年の皇太子殿下御巡啓に次ぐ御盛事、宮殿下は七月六日上野御發、小樽御着は七月十日、翌十一日小樽御發、朝里駅は午後五時一分御通過あらせられた。

殿下行啓に当り朝里として特筆すべき事項はお召列車を小樽札幌間機関助手の大任を帯びた者は朝里村村田石蔵の甥徹造であつた。

又、殿下札幌豊平館御泊の際御食用に上納された桜桃は、朝里の中祢義光方の桜桃「養老」であつた。

大正十一年

小樽に市制施行

(1922年)

八月一日を以って函館、小樽、札幌、旭川、室蘭、釧路の六区に市制を施行された。  
市制施行当時の人口左の通り

函館	一四三、六五五	旭川	五四、九三一
小樽	一〇〇、八〇八	室蘭	五六、〇八二
札幌	一〇二、四六三	釧路	三九、二二九

大正十二年

朝里川引水問題解決

(1923年)

小樽市では十五萬市民の飲料水と將來の大發展に資するため勝納川の用水のみでは不足なので朝里川引水を企劃し、これに要する経費として起債の認可申請を主務省に提出したのは大正十年であった。

これを聞いた朝里村では村會の決議を以つて公益上支障ありとの理由の下に主務省に対し小樽市の起債を認可せざるやう電請、續いて陳情書を提出した。

これを知つて小樽市は朝里村に対しその諒解方を懇請したが尔来三年折衝に折衝を重ね、この年八月三日左の條件を以つて両者圓滿に解決し朝里川の水を小樽市へ供給することとなつた。

一、渇水期と雖も一個の水は放流すること

二、小樽市より熊碓本村を経て朝里山ノ上へ通ずる道路修築費に充つるため地元補償金として金三萬円を提供すること。

大正十二年

#### 第十二回村議改選

(1924年)

六月一日施行の第十二回村議改選に左の十名が当選した。

内田末作	阿部徳太郎	斉藤平吉	朝永尋三	山崎吉太郎	久末末吉
鹿内元吉	宮城義雄	藤村栄作	井口亀次郎		

大正十二年

#### 朝里村役場廳舎竣工

(1924年)

朝里村役場廳舎は旧朝里小學校校舎を利用してゐたため腐朽したので、この年、三九三〇円を以つて小樽中沢幾五郎に落札、二階建に改築六月竣工した。

大正十二年

小樽郡漁業組合事務所竣工

(1924年)

小樽郡漁業組合は大正七年十月創立し、事務所を小樽住ノ江町小樽水産會内に置いてゐたが、不便なので朝里村へ新築することとなり工費四、一四五円を以つて小樽円保室蔵に落札、この年十月に竣工した。

前記朝里村廳舎と共に二階建二棟が朝里村の偉觀となつた。

大正十四年

町田先生頌徳碑建設

(1925年)

同一學校に勤續三十三年に及ぶ朝里小學校長町田外也は大正九年十月三十日教育勅語渙發三十年記念日に死亡したるにより、同窓會總會に於て故先生の頌徳碑建設を議し本年の鯁大漁を機會に寄附金を募り建設委員長に小松市郎を推して着々準備を進めた。

即ち碑の設計を手宮保線区长森勝男に委嘱して成り、碑文字は当時の参謀總長上原勇作元帥の承諾を得て揮毫を得、碑文は当時の後志支廳長石川啓に依頼して撰し、工事は土木



請負業小樽汐見台町黒坂金平之を請負ひこの年十一月二十三日新嘗祭を卜し同窓會員参集折からの降雪を犯し建碑した。

場所は旧朝里神社敷地の高台で、これには氏子總代一同より五坪以内を永久無料の借入承諾書を得、尚小樽警察署より建碑の許可も得た。

而して翌大正十五年五月十六日之が除幕式を舉行した。

大正十五年

### 第十三回村議改選

(1926年)

六月一日施行の第十三回村議改選に左の十名が当選した。

内田末作    阿部豊太郎    朝永尋三    斉藤平吉    久末末吉    山崎吉太郎

加我峰太郎    大野利八郎    宮城義雄    井口亀次郎

大正十五年

### 青年訓練所開設

(1926年)

七月一日全國一齋に青年訓練所を開設。朝里青年訓練所外三訓練所も開設された。後年これが青年學校と改称された。

大正十五年

朝里駅改築

(1926年)

この年の春、朝里駅が改築された。

昭和二年

海岸道路の完成

(1927年)

朝里川引水問題の條件の一たる熊碓本村を経て朝里山の上に通ずる道路の開鑿は札幌鉄道局三萬円、道廳三萬円、朝里村七千五百円の工費を支出し熊碓の俗称「百間柵」の崖を崩し線路に沿ふて道路を開鑿、大正十五年着工、昭和二年竣工す。

十二月十日熊碓小學校で開通式を舉行、この日初めてこの海岸道路を朝里駅まで自動車が運行した。

昭和三年

秩父宮朝里岳御征服

(1928年)

運動趣味に御熱心な秩父宮雍仁親王殿下には北海道のスキー御練習のため御來道、二月二十四日輕川駅に御下車、手稲山に登りパラダイスヒュッテにて御泊、翌二十五日は更に奥深く御進みなされてヘルベチアヒュッテに御泊、三日目は吹雪の中を目的地朝里岳に

御登り遊ばされ、午前九時、一、〇七九米地点に達し此處より引返し錢函着午後五時汽車にて札幌へお歸りになった。

昭和三年

(1928年)

第十四回村議改選

六月一日の第十四回村議改選には左の十八名が当選した。

これは普通選舉の最初であつた。第一回の普選有權者は左の通りであつた。

熊碓 二四九

朝里 二〇一

張碓 一六二

錢函 四二七

計一、〇三九

盛久太郎

阿部豊太郎

竹内義雄

熊谷九之七

村上杉太郎

小松市郎

朝永尋三

新谷久五郎

斉藤平吉

×木村栄七

久末末吉

浪花誠一郎

井口亀次郎

宮城義雄

大野利八郎

田村五三次

伊藤由太郎

笹原沢太郎

△酒井元三郎

右村議改選に当り最低得票者二十七票の木村栄七は当選者に非ずして酒井元三郎の得票二十四票の外に尚十數票あるべきに依り当選無効の訴願書を道参事會に提出、この年十一月九日付けを以つて参事會では酒井を当選者とする旨の裁決を為し、この旨澤田長官より告示となった。

昭和四年

斜面道路の開鑿

(1927年)

御即位大典の記念事業の一として朝里駅より山の上に通ずるための斜面道路はこの年秋十月開鑿され、從來の不便を一掃することが出来た。

昭和六年

札幌國道改修着工

(1929年)

り、

時の浜口内閣は失業救済土木費として全國府縣に割當てたが本道へは百万円の配当あり、

その内二十五萬圓を以つて多年の懸案であつた札幌國道を改修することとなった。

即ちこの年六月から着工したが、この年度では工費二十五萬圓で小樽若竹町から朝里砦里まで四籽五米二十糶、翌七年度では砦里から張碓小黑岬まで工費七十五萬圓で七籽三三

米六九糶、三年目の八年度には工費二十萬円で小黒岬から銭函星置まで三籽六三三米を竣工、合計百二十萬円十四籽六七一米八九糶、幅員八米五、有効幅員七米五の國道が完成した。これ、即ち國道四號線である。

國道四號線Ⅱ函館から札幌まで、大正九年指定、昭和二十七年國道五号線として指定を受ける。

昭和七年

朝里橋渡橋式

(1932年)

國道朝里橋の渡初式は一月十日舉行した。この日、先頭の三夫婦は朝里村の徳光富作夫婦、息子富太郎夫婦、孫正雄夫婦であつたが、正雄夫婦は当時奈良にあり、この日に間に合はなかつた。

朝里橋渡橋式Ⅱ橋の渡橋式は一家三世代夫婦を先頭に行なわれる例が多い。一家三世代健在のように末永く丈夫であれとの意味からか、江戸期には行われていたと云う。徳光一家以外にも鷺田一家も続いて渡つたという(横川幸作資料、鷺田家二代目和三郎氏自筆メモ)

昭和七年

第十五回村議改選

(1932年)

六月一日第十五回の村議改選には左の十八名が当選した。

盛久太郎 北田弘三郎 竹内義雄 新野栄次 村上杉太郎 手嶋繁作 小松市郎  
新谷久五郎 片岡 秀 小林幸作 徳光富太郎 久末末吉 浪花誠一郎 井口亀次郎  
宮城義雄 大野利八郎 田村五三次 笹原沢太郎

昭和七年

定山溪自動車専用道路開鑿

(1932年)

小樽定山溪自動車株式会社では従来の毛無山迂回の不便を除去するため朝里山の上より一直線に道路を改修、六年に着工して七年に完成した。

昭和九年

札幌間省営バス運行

(1934年)

六月一日より札幌國道を省営バス運行した。

札幌最初の自動車所長は大谷雄三郎であった。

省営バス⇨当時は鉄道省が運営

昭和九年

魚藍觀音安置

(1934年)

定山溪自動車道を朝里川上流に遡り左股の滝附近に小樽□小賣商組合では□藍觀音を安置し、八月二十一日これが入佛式を舉行した。

昭和十年

朝里岳麓句碑建立

(1935年)

定山溪自動車道の朝里川上流頂上にこの自動車道株式會社では本道俳人の雄たる青木郭公の句碑を建立。八月十一日その除幕式を舉行した。中里久造の功を悼み

車道開く 原始茂りの 雲の上

郭公

昭和十年

朝里郷土研究會創立

(1935年)

朝里村の史實を研究しこれを後世に益せしめんとの趣旨に小林廣發起し二月十日小林宅にて朝里郷土研究會を創立した。

會長に小林廣、副會長に石山勘七、就任した。

昭和十年

(1935年)

朝里校創立六十年記念式舉行

朝里校は創立以來六十年となつたので、出身有志者の發起で十一月二十三日記念式を舉行した。

即ち当日の式典には左の功労者の表彰を行ふと共に、午後は物故者の慰靈祭を催した。更に午後二時より祝賀會を開催、翌二十四日は女子及丁年未滿者の茶話會を開いて記念の催とした。

表彰を受けたる者

△十年以上勤続の職員

故町田外也、和田幸次郎、町田ムメ、町田勇

△十年以上就任の學務委員

朝永尋三、小松市郎、故佐藤留吉

△特に功勞顯著なる者

故徳光喜八、故亀谷藤次郎、故河原勝興

△金品寄贈の者

斎藤兼太郎、片岡 秀



佐藤留吉||佐藤藤吉、小林多喜一の姉の夫

昭和十一年

### 第十六回村議改選

(1936年)

六月一日施行の第十六回村議改選には左の十八名が当選した。

これは朝里村最終の村議である。

北田弘三郎 木下豊太郎 吹田止 竹内義雄 藤平喜三郎 徳光富太郎 小松市郎  
新谷久五郎 片岡 秀 西川政義 久末末吉 藤村竜造 余湖乙松 井口亀次郎  
宮城義雄 大野利八郎 原田源蔵 野辺地 務

昭和十一年

### 朝里軍友会設立

(1936年)

在郷軍人の資格喪失した者の内、今後共國家のお役に立つべきなりとして老兵等相集ひ八月十五日錢函龍眼寺で朝里軍友會を設立した。

會長 小松市郎

副會長 木下豊太郎 久保田和五郎

理事 小林 廣 遠田辰蔵

監事 余湖乙松 北田弘三郎

評議員 山崎吉太郎 外九名

昭和十一年

満陽丸擱坐

(1936年)

十月二十三日前日来の時化のため山下汽船所有貨物船満陽丸(七、一五四屯)は、朝里前浜一五〇米の個所に擱坐した。

翌十二年大阪の岡田勢一の手によつてこれが船体を解体した。

昭和十二年

燈籠流し施行

(1937年)

朝里第二男子女子両青年團では支那事変戦没者の英霊を慰めんが為め、八月十五日夜、朝里駅前浜で流燈會法要を営み、前浜一帯時ならぬ美觀を呈し村民の拍采を得た。

この流燈會は翌年も催された。

昭和十二年

凡平歌碑除幕

(1938年)

本道口語歌壇の總帥並木凡平（本名篠原三郎）の主宰する小樽青空詩社同人の主唱を以つて凡平の歌碑建設を企劃し、その位置を朝里不動尊境内と決定、九月二十四日の祭日を期してこれが除幕式を舉行した。

この口語歌碑としては全國随一のものである。

廢船の マストに今日も 浜鴉

啼いて日暮れる 張碓の浜

凡平

原著には十四年とあるが除幕式写真（小樽文學館所蔵）には十三年九月二十四日と記載されている

九月二十四日の祭日＝朝里不動□例祭日

昭和十五年

朝里、高島、小樽に合併

（1940年）

小樽市は大小樽建設の抱負の下に、朝里、高島両町村を合併せんものと三年前より両町村に呼びかけてゐたが、愈々その機が熟し、高島町はこの年四月一日に、朝里村は同じく九月一日に小樽市と合併した。

これで永年の朝里村にも終止符を打ったのであり、小樽はこの年十月一日の國勢調査には一躍一六四、二八二人、全國で二九位の大都市となったのである。

時の小樽市長河原直孝は両町村合併を祝して左の感懷を發表した。

鳳翼一搏九萬仞

北進圖南方寸中

借問滿都具眼士

振興長計有策否

義山人

大鳳の翼ひろけて天翔くる

雄々しき姿われ仰ぐかな

義山人

尚七十年の朝里村、二級町村制実施以来四十年間の歴代村長を左に掲げて参考とす。

初代	八幡 貞	二代	森脇平作
----	------	----	------

三代	鶴見時一	四代	小浅秀雄
----	------	----	------

五代	林 昌雄	六代	杉山左内
----	------	----	------

七代 北條瀧三郎

八代 吉野幸徳

九代 佐藤庄吉

十代 山村直松

十一代 山本軾太郎

十二代 岡部叡模

十三代 大渕清樹

十四代 池田 薫

十五代 田中作平

十六代 津田運吉

補追

玉の里関

昭和十四、五年頃 高田藤太郎長男、勇、相撲トナリ玉の里と名のる

駐在所移転

昭和十七年 三栄ノ計ヒニヨリ學校上に移築

当時の巡査、堀内三郎、甲斐二三、菅野安藏の順

送信所建設

昭和二十六年 五月海上保安庁送信所建設

昭和二十七年五月十九日開通式

朝里中學校運動場竣工

昭和二十六年 夏完成

町会創立

昭和二十六年 十一月三日朝里町会創立

庶民住宅

昭和二十六年 十二月十戸竣工

校歌決定

昭和二十九年 三月三日發表、作詞小林廣、作曲竹田晴三（ただかはるみⅡ第十

八代朝里小學校校長、昭和二十七年五月から三十二年六月在職）

三栄閉鎖

昭和二十九年 四月限り三栄朝里工場閉づ

朝里温泉

昭和二十九年 六月一日開業

朝里診療所

昭和二十九年 八月一日より市立小樽市民病院朝里診療所開業

両陛下

昭和二十九年 八月十八日上り 八月二十一日下り御通過

小樽市との合併以後の記事の為のメモと思われる、火災の項は明治三十九年記事とした

朝里叢書第二卷

朝里郷 第史概観 第二版第二刷

編者 小林 廣

編纂 小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会

大友慶一 末永 通 瀧内淳子

監修 朝里郷土史資料調査研究所

主宰 小林定典

発行日 平成十六年一月五日

発行 NPO法人 小樽・朝里まちづくりの会

事務局 小樽市新光4丁目1番16号

北海道新聞中販売所内

連絡先アドレス [suenaga@gakushikai.jp](mailto:suenaga@gakushikai.jp)